

アナトール・フランスの作品 における対話

対話の困難

加 藤 林太郎

1

アナトール・フランスの小説に、対話する場面は数多い。人と人との対話とは限らない。リュザンス荘の書庫で古文書を調査中に寝入ってしまった学者シルヴェストル・ボナールは、うたた寝の夢の中でさえ、横柄な仙女の女王と対話するし、ベルジュレ教授は話し相手がなければ飼い犬のリケと対話をする気である。

短編小説の一編すべてが対話からなることも珍しくはない。短編集『クリオ』の中の『ファリナタ・デリ・ウベルティ別題内乱』は、ギベリン党の首領としてフィレンツェに専制政治を布いているファリナタ・デリ・ウベルティとドミニコ教団僧の有力な政治家フラ・アンプロジオとの対話である。同じ『クリオ』の他の一編『ミュイロン号』は、遠征先のエジプトを去り、権力掌握を狙って本国へ不敵な帰還を目論むナポレオンが、地中海の制海権を握っているイギリス艦隊を避けながら一ヶ月間にわたって海上をさまよう間に、同行の軍人、学者らと交わす会話から成りたっている。時には長編もが全編会話である。『白き石の上にて』においては、古代ローマの遺跡の上において、文明の過去と未来が、学者を交えた数名の仏伊対話者によって延々と議論されて行く。

これらの対話を見てみると、ほぼ同質の、高い対話能力を具えた人々によっ

て議論が展開されていることが分かる。フランス小説の主人公は世界で一番学歴が高いとかつて言われたが、こうした対話小説もその極端な一例であろう。しかしアナトール・フランスの作品には、対話に不向きな登場人物も現れるし、対話の困難もまた起こる。多くの「話す作中人物」がいるアナトール・フランスの作品の中で、「対話の困難」はどのように発生するのであろうか。

2

作者最初の小説『ジョカストと痩せ猫』（1879）は一つの表題のもとに実は全く異なる二作品をまとめているのである。不義、毒殺事件、女主人公の自殺といった暗い内容を持つ『ジョカスト』とは対照的に『痩せ猫』はラテン区にたむろする気楽な青年芸術家たちの生活を描いている。そしてその中の一彫刻家は「創らざる芸術家」として作者の心にとどまり、後に『ピエール・ノジェール』（1899）の中に画家として再登場することとなったのである。

旧フランス植民地のハイチからかつて独裁者スールク皇帝配下の文部大臣兼海軍大佐で今は代議士の混血児アリドール・サント＝リュシがハイチ芸術調査委員会委員長としてパリへ乗り込んでくる。パリ来訪の目的は二つあって、一つはハイチ帝政時代の圧制（彼は皇帝に背いて革命に加担した）の犠牲者の魂を慰める記念碑の建立のためパリの彫刻家に設計を依頼する件である。さらにもう一つの目的は、フランスで勉学中の子息レミに関することで、彼をして大学入学資格試験に合格させるため優秀な家庭教師をつけることであった。ところが父代議士サント＝リュシの目論見はいずれも外れて、子息はバカロレアにつき合格せず、思いもかけぬ絵の道に進んでしまう。一方、記念碑建立の要件もまた少しも渉らないのである。その原因は彼が設計図を依頼した彫刻家ラバーヌの「反創造」性にあったと言える。ラバーヌによれば、記念碑が目に見えぬためには、まず150冊の本の読破が必要で、今は黒人の色素と西インド諸島の地質学上の組成に関する書物を読んでいるところだと言う。彫刻の中に思想を盛るためには、「部分は全体の一部」なのだからまず全体を研究しな

ければならない。代議士があと一週間でハイチに戻り、委員会に設計図を提出せねばならぬ時になっても、ラバーヌは今度は西インド諸島の植物の分布を研究中であった。この人物、彫刻家ラバーヌこそアナトール・フランスが作り出した「創らざる芸術家」の第一号とすることができる。彼は多少の年金があるため、貧乏仲間のやど代りをしてやっている一方で、自分は多弁でもって人を煙に巻きつつ悠々と創らざる芸術家に留まっていられるのであろう。

この様な創らざる芸術家のかたわらには「創る」芸術家が必ずいて、対照を際立たせているのである。それは「痩せ猫」亭の女将の元愛人、画家ポトレルであろう。フォンテーヌブローで二年間絵を描いて過ごした後モンマルトルにアトリエが空くの待ちながらラバーヌの所で絵を描いているのである。ポトレルは一日中物も言わずに描き続ける。「ポトレルは口数が少なく、また口下手だった」¹⁾。ラバーヌの芸術的哲学的理論に向かっても、たった一言「そうかも知れんがね」としか答えない。仕事熱心のこの画家がたまたま手を休めているのでたずねると、表現を持たない彼はガラス窓の方へ腕をのばすと「あの、あいつが邪魔で、描けないのだ」²⁾と言う。あいつというのはまばゆい太陽のことであった。この素朴な発言は作者の気に入って、20年ののちに現れた半自伝『ピエール・ノジュール』の一話でもう一人の「話さない」芸術家ムーニエの口からも何度も繰り返されるのである。アリストクラシー好きの多弁な彫刻家ラバーヌは熱狂的な共和派でさらに多弁な歴史画家デュブロケになり、農民らしい筋骨たくましい画家ポトレルは樹木ばかり描いて世に認められる風景画家（レジヨン・ドヌール・コマンドゥール勲章の佩用者）ムーニエとなった。しかし依頼された記念碑の設計にすら取りかからない彫刻家は、ルーベンスの模写一枚しか残さずに死ぬ歴史画家となった時には、無口な画家の成功との対照においてより悲劇性を増したのである。

3

アナトール・フランスがキリスト教のローマ世界への伝播を考察したのは

『白き石の上にて』およびブラジルでの講演である。『白き石の上にて』(1905)は、ローマの遺跡の上に集まった対話者のいずれかが物語る哲学的なコント二編、およびそれを中心とした対話から成っているが、はじめに語られる『ガリオン』はローマ帝国の高官と最初のキリスト教徒との出会いをえがいた物語で、それをめぐっての対話からキリスト教の勝利が考察されて行く。フランスがブラジル旅行の際おこなった講演も部分的に『白き石の上にて』の議論を再びとり上げている。

『ガリオン』は、その表題の示すとおり、セネカの兄ガリオを登場させる。このローマ人が登場人物として選ばれたのは、もちろん彼がユダヤ人らの裁判において使徒パウロに出会った人物だからである。フランスはこの物語で使徒行伝の一場面をとりあげたにすぎないと言ってよい。ただ、使徒行伝のなかでわき役の一人にすぎないガリオの側からこの物語は述べられているのである。

裁判官としてのガリオはユダヤ人たちの騒擾に対して日々繰り返される事件に対するような疲労感のまじった気持ちを抱いており、政務へのまじめさから、友人たちとの対話を中断してこの日の訴訟(役人は「小さな事件でございます」と伝える)をも扱うのであるが、原告側、被告側いずれの議論も、その主張の激烈さにも拘わらず彼の判断の決め手とはなりかねる有様であった。そこで使徒行伝にあるとおり彼は「そんな事の裁判人には」なることを欲せず⁽³⁾、よって彼らを裁判所より追い払ったのであった。そしてガリオは彼を待っている友人達のところへもどると、彼に裁判をしてくれとわざわざ呼びに来た事件は「およそくだらない滑稽な事件」なのだと言い、これらユダヤ人達が人間の智慧のありがたさとは縁のない連中であることを嘆くのだった。

しかし、これだけではアナトール・フランスがこの物語を寓話とするのには十分でない。ガリオとその友人であるローマの貴公子たち、ギリシャ人の哲学者らは、ちょうどその日、ローマ帝国の未来、オリンポスの神々の未来について議論を交わしていたのである。皇太子ネロの来るべき統治にローマ帝国の繁栄を見ようとし、また神々の王座はヘラクレスに受け継がれるであろうという彼らの議論、これは未来の真の担い手たる使徒の一人に何の関心も示さなかつ

たことにより、ますます空しいものとなるばかりである。歴史の中における変革は、その中にある者には気付かれず、未来についての議論は空しく愚かなものであるという寓意へこの物語は到るのであろう。

その寓意を聴き手たる対話者の一人が要約する。「僕達は今、一人のギリシャの哲学者と数名のローマの学者とが一緒になって、彼らの祖国や、人類や、地球などの未来の運命を探究したり、ジュピターの後継者の名前を知ろうと努力したりした話を聞いたわけだね。そして、彼らがこういう気遣わしい探究に没頭しているときに、新しい神の使徒が彼らの前に現れて来たのだが、彼らはその使徒を軽蔑したという話だったね。ところで、僕はこの点で、彼らが不思議にも明察に欠くところがあって、この彼らの欠点のために、彼らがあればほど知りたがっていた事柄を知り得る唯一の機会を失ってしまったのだと言いたいのですよ」⁴⁾。この聴き手によれば、「最も輝かしい精神を持ち最も明敏な知性を持った人といえども、不意の啓示にあえば、全く盲目になってしまうことの良い例」⁵⁾だという結論が生れるのである。つまりガリオがうまく機会さえつかんだならば、使徒パウロから未来の秘密を探り出すことができたというわけである。

しかし、ガリオがパウロと話すことは、そんなに容易なことではなかった、と語り手は指摘する。「何しろ、この二人がどうしたら思想の交流をはかれるか、誰にもわかるまいよ。大体、聖ポールは自分の考えを言い表すことが下手だった。ガリオの方は、教養のある人達と話をすることに慣れているけれども、ユダヤ教会の長老という言葉などは知らないのが当然だ。で、こういう二人に、どうして互いの意見を交換し合うことが出来たでしょうか」⁶⁾と言う。「通俗向きの面白い小説の作家が、原始キリスト教会の使徒達に、ローマ帝国の哲学者や伊達者とふんだんに話をさせたりしているが、それから見れば、僕が今諸君に話したガリオの対話の方が、面白味は少ないかも知れないが、その代わりにはるかに真実味があるつもりですよ」⁷⁾。作者が異文化間の対話に対して懐疑的であるなどと言う必要はないが、歴史小説（『クオ・ヴァディス』）の中のローマ人のように初期キリスト教徒と対話し、相互理解を行いたと

は思っていないと考えられる。

この作品は前年の1904年2月、社会党の新聞『ユマニテ』の創刊号から連載されたものである。内容は一貫して、未来に対する興味と不安を扱っている。その内容は三つに分かれ、第一部は、古代パガニズムにとって代わるべくキリスト教がローマ帝国へ入り始めた時のことを扱い、第二部では現代の動揺を始めた世界を批評し、最後に、来るべき社会主義的な世界連邦を空想している。

作中、現代批評の部分形成するのは、ヨーロッパ諸国の植民地主義の罪悪にたいする非難、おろび平和的秩序の可能性に対する考察である。しかし1905年に西欧諸国の植民地主義を扱うことは、殆ど必然的に次のことを扱うことになるのである。即ち、1894年の日清戦争、及び1904年の日露戦争である。日清戦争は西欧化した日本の植民地戦争への参加であり、日露戦争は更に大胆な挑戦であった。ここから日本の西欧化に対する見解が生まれている。

日本の西欧化、資本主義化とその競争への参加は、アメリカの強大化とともに、非ヨーロッパ世界の台頭と意識されるようになる。欧州の世界的優越とそれに伴う安定感は失われ、第一次大戦後「ヨーロッパの危機」と呼ばれる一連の主題が生み出される。こうした危機の主題は19世紀の「^{ペリルジョーズ}黄禍論」以来すでに相当長い歴史を有していると見るべきなのだが、『白き石の上にて』はその発端に近い部分に位置すると言えるであろう。黄禍論批判者としての作者の立場が明快に述べられている。この作品を読んだ柳田國男をしてアナトール・フランスの愛読者とした一冊である。ちなみに同書には、西暦2001年にヨーロッパ合衆国がつくられるという説が紹介されている。

4

アナトール・フランスの小説の登場人物は法廷における証人はおろか、しばしば被告にさえなる。『人間悲劇』の修道士フラ・ジオヴァンニ、『クランクビーユ』の野菜売りクランクビーユ、『ペンギンの島』の作家コロンバン、天文

学者ビドー・コキーク、『神々は渴く』の旧貴族プロットー。一度や二度ではない。この作者に裁判、しかも不正なる裁判の被告を描かせたものはドレフュス事件の経験だといわれる。『ペンギンの島』のピーロット事件はドレフュス事件にほかならず、判決の不正を黙過しえず立ち上がるコロンバンはゾラ、このコロンバンを応援すべく象牙の塔ならぬ天文台から降りて来るビドー・コキークは作者自身だと言うことは一読了解できる。ドレフュス裁判における親ドレフュス派の勝利にもかかわらず、『人間悲劇』から『神々は渴く』までの18年間に裁判については作者はむしろ悲観の度を強めて行ったように見える。なぜなら『人間悲劇』のフラ・ジオヴァンニが法廷に立って、人間の正義を排し、神の正義を訴えて長広舌をふるうのを見た読者は、18年ののち革命裁判所で、身分も同じ修道士ロングマールが、あんなにも準備を重ねた弁論を裁判の当日になってあっさりとおきらめるのを見ることになるからである。しかしフラ・ジオヴァンニは町のお偉方や裁判官を前にして、堂々と議論を展開できるような人物ではなかった。彼は「話す人」に急になったのである。

《ヴィテルボの町のフランシスコ会修道士フラ・ジオヴァンニは服従を楽しみとしていた。彼は行動することを恐れ、考えることを恐れたのである。行動は空しく、思考もまた悪だったからである。「修道士ジオヴァンニは心も頭も単純であり、口の重い生まれつきであった。人間に向かってものを言うすべを知らなかったのである。』⁸彼は貧しい人々に衣を脱いで与え、冬のさなか、しばしば裸で広場の子供と遊んでいるのを発見された。彼にお堂の番をたのむと、高価な奉納物を貧しい人に施してしまうのだった。この世にあるものは悉く神のものであったからである。しかしある日施し物を乞う寡婦に化けた悪魔が近づき、祭壇の銀のコップを施し物として受け取ると、修道士に言う。この銀器はお金になって情夫の手に渡り、その男は自分を捨てた騎士を闇討ちにして殺してくれることになっていると告げフラ・ジオヴァンニを悲しませる。悪魔は純朴な修道士に思考の種子をまき、不安を起こさせたのである。次に天使の姿で修道士を訪れた悪魔は、修道士の唇に炭火を当て、考え、話す能力を与える。「この火の力で、お前の唇はいつまでも純潔であり、潑刺と動くである

う。私の作った火傷の跡はそこに残るであろう。お前の舌の根はほぐれ、お前は人間共に話をするであろう。いのちの言葉を聞かせ、心の単純さに依ってのみ救われることを、人間共に知らせてやらねばならぬ。それ故、主は単純なるものの舌の根をお解きになったのだ。〔⁹〕舌を解きほごされたフラ・ジオヴァンニは、慈善と清貧と地上の人類同胞を説きにでかけ、はげしい労役におしひしがれた石切りに出会って、貧しいものがしいたげられていることを教えられる。社会が圧制と所有権によって支配されており、そこからさまざまな悪や苦悩が生まれることを知った修道士は、社会秩序の不正に心を動かされる。

ヴィテルボの町の主立った老人によって作られる「善の友」の会は市民に善を奨励するための集まりであったが、その会合に現れた修道士は会の偽善を告発する。貧者が富者の所有するものを守るように拘束することがこの会の「善」にほかならぬとして、新しい社会正義の福音を説き、法律の不正を公言する。そのため獄につながれて裁判を受けることになる。修道士は、真理は絞首台まで一緒に来てくれると自分に言い聞かせるのだった。

獄吏に化けて牢獄を訪れた悪魔は修道士へ真理への疑いを吹き込む。巨大な車輪の表に、おびただしい、色様々の旗に染め抜かれた真理の言葉がひしめく。悪魔がひずめのある脚でこの車輪を蹴ると車輪は激しく回転を始めやがて真っ白な円となる。真理は修道士が信じたようにただ白いのではない。あらゆる色が混ざり合った不純一なものだということがこのようにして示され、修道士は涙を流す。裁判の結果、国家の安全を乱す陰謀を企てた罪で死刑が言い渡される。殉教者になりたい気持ちを失った修道士の前へ悪魔は現れて死刑囚を救い出し、町を見下ろす山の中腹へと連れて行く。》

話せるようにされたフラ・ジオヴァンニは喜び勇んで町へと出かけるのではないようである。「主よ、人間に物を言うために私をお遣わしになるとは、私を罰しようとの思召しでございませうか。人々は決して私の言葉を耳に入れないでございませう」〔¹⁰〕。神の道理は人間の道理と正反対だからである。彼の弁舌が町の金満家を代表する裁判官の石のような心を動かしたとは思えない。しかし今や舌を解きほごされた純真な修道士は、孤立無援をものともせず福音

を説くのである。この彼が力をなくしたのは悪魔によって真理への疑念を吹きこまれたからである。

しかし、ドレフュス擁護派としての作者の経験は、またちがった、あらたな裁判の不正を彼にさとらせたのではないだろうか。フラ・ジオヴァンニが生命をかけて糾弾したような、階級と秩序に奉仕する法律の不正だけでなく、予断と偏見もまた善の友と手を結び、犠牲者を生むことを知らされたのであった。

『ペンギンの島』の「ピーロットと八万束の稜」裁判は、いかに戯画化され、卑小化されているとはいえ、現実のドレフュス裁判を再現したものである。『クランクビーユ』(1904)において、作者は軍事裁判という密室のなかでの醜悪な冤罪事件を町角へ移し、警官と野菜売りの間に起こった不幸な冤罪事件に作りかえたのである。

手押車に野菜を積んだ呼び売り商人のクランクビーユは、客の一人の支払いを待たされる間に不幸にして交通渋滞を引き起こしてしまう。現れた警官の移動命令に即座に従うわけに行かなかったことがクランクビーユに災する。人だかりができて逆上した警官によって、不服従は口答えと誤解され、口答えは警官侮辱と誤解されるにいたる。野次馬の中には公正な目撃者である老教授もいて、警官の誤解を解いてくれようとするが、クランクビーユは警察へと引き立てられてしまう。裁判では、老教授が反対の証人に立ってくれるが、警官に誤りなしという予断のもとに尋問は進められる。なお悪いことには弁護士は官尊民卑の立場に立ってクランクビーユに自白をすすめる、クランクビーユまでもが、「犬め！」と叫んで警官を侮辱しなかったかどうか自信がなくなってしまう。有罪とされて禁固刑に処せられたクランクビーユが元の町へ戻ってみると、顔なじみの客たちは彼を冷たく迎える。庶民たちは罰と罪とを素朴にも混同し、「罪人」クランクビーユにはお客がなくなってしまう。孤独と絶望から酒呑みになったクランクビーユは徐々に町の浮浪者とちがわない生活を送るようになる。今の彼には、働かずに食わしてくれるあの監獄がより良い所に見えて来てしょうがない。そこへと戻るには、辛い目をみて習いおぼえた取っておきの方法があるのだ。ついにある雨の夜、町角の街灯の下に立つ警官に「犬

め！」と侮辱の言葉を浴びせる。重ねての侮辱にもかかわらず、忍耐強い警官は逆上せず、おだやかにクランクビーユをたしなめる。再び見放されたもと野菜売りは雨と闇の中へすごとと姿を消して行く。存在しなかった侮辱のために罰せられたクランクビーユは現実の罵言によっては罰してもらえなかったわけである。

官尊民卑は裁判の不正をまかり通らせたが、実は原告側と被告との間にある言語使用力の優位と劣位も真実の申し立てを妨げる有様がいたましくも滑稽である。クランクビーユは、自分につけられている弁護士にさえも自分の身に起こったことが話せない。「それは彼にとってなかなか容易なことではなかった。なぜかという、彼には、まとまって物を言うという習慣がついていなかったからだった」¹¹⁾。法廷に入った被告クランクビーユが、訊問において、自分になされた質問に対して答弁することができたら、もっと、事件を明らかにすることができたにちがいがなかった。しかし「クランクビーユには討論の習慣というものがなかった。そしてこうした人達の前に出ると、尊敬と恐怖から口が利けなくなってしまった。そこで、彼は、黙っていた。そして裁判官は、自分で答弁を作り上げてしまっていた」¹²⁾。

「で、お前は『犬め！』と言ったことを承認するんだな。」

「私が『犬め！』って申しましたのは、お巡査さんが『犬め！』って仰しゃったからでございます。で私も『犬め！』って申しましたんで」¹³⁾。彼の言おうとしていたところは、自分が思いがけないとがめを受けたのに仰天して「私が『犬め！』って言ったって？とんでもない！」などと繰り返し口にしたにすぎない、つまり「私が？ まあ、私にそんな大それた事が言えたとお思いになりますか？」と言おうとしたのにはほかならないということだった。それに対して警官第 64 号の陳述はしっかりした、落ち着いたもので、明らかに好意を以って裁判官の耳に聞かれたのだった。「十月二日の正午頃勤務についておりますと、リュ・モンマルトルのところで行商人と思われる一人の男が眼に入りました。男は...」

クランクビーユは『人間悲劇』のフラ・ジオヴァンニとちがって孤立無援で

はない。事件の目撃者が証言してくれるのである。オフィシエ・ド・ラ・レジオン・ドヌール帯勲者であり、アンプロワズ・パレ病院長たるダヴィッド・マティユ博士である。「私はその場に居合わせました。私は警官が思いちがいをしているのに気がつきました...」。そして皆は、クランクビーユが無罪になるものとばかり思っていたにもかかわらず、裁判長は有罪の判決を言い渡す。「裁判所は、その判決の根拠を、マトラ巡査の証言に置いたのだった」。

クランクビーユ本人の第一の感想は「何しろ、あの人達はあんまり早く喋りすぎるよ」¹⁴だった。目撃者たる老教授の申し分のない反対証言も予断と偏見の前に無力だったわけであるから、仮にクランクビーユがフラ・ジオヴァンニのように舌がほぐれて思いのままに弁じたとしても、事態が全くかわったかどうかは分からない。クランクビーユは釈放後、彼を白眼視する元の客たちに八つ当たりする時は喧嘩早く、「山あらしみたいだ」と仲間と言われるのであるから、法廷では、ほかならぬ彼自身の心に住む権威尊重、官尊民卑主義が彼の舌を麻痺させていたのでもある。

『神々は渴く』(1912)の修道士ロングマールは、法廷で神の正義を説くフラ・ジオヴァンニともちがうし、我にもあらず権威に弱い野菜売りクランクビーユともちがうが、こと弁論に関して、自らの学識、知力を発揮する気でありながら、あきらめの良い所はクランクビーユと変わらない。獄中でロングマールは裁判での弁論の準備にかかり切りとなり、あらゆる紙や板の上に、すすとコーヒーがらで作ったインクで原稿を書きためて行く。しかし裁判は大勢ひとまとめの手短なもので、弁論の意欲を失ったロングマールはすべてを神の思し召しにまかせ、裁判長が訊問の中で宗派をまちがえて言ったのを直したただけであった。

5

対話が意のままにならないことは、その人にとり歴然たる弱点であろう。町の野菜売りクランクビーユにおいてはことに悲劇的で、思わぬ不幸からついに

脱け出すことができない。しかし作者は対話者のうち「物が言える人」の能力を果たして絶対的な長所とみなしているのであろうか。『二人の友』の歴史画家デュブロケは多弁的非創造をついに脱しえず、話す能力を得たフラ・ジオヴァンニの説く福音は法廷に賛同者を見出さない。ローマ帝国高官ガリオは使徒パウロと対話をする気さえ起こさないだろうとされる。彼の作品にあっては「物が言える人」も多分に自己充足的であって、創出力はもちろん、闘争心にも欠ける。『現代史』のベルジュレ教授は、まさにアナトール・フランス的な「話す人」ではあるが、どこか無力感をただよわせてさえいる。

しかしベルジュレ教授と『鳥料理レーヌ・ペドーク』の「話す人」、神学博士コワニャール師とはたしかに同じではない。コワニャールの「話」も往々にして相手不要の一種の独語、括弧をはずせば『エピキュールの園』のアフォリスムとなりかねない。しかし彼はひとえに「話す人」ではないのである。

『鳥料理レーヌ・ペドーク』のコワニャール師の冒険はファブリオ風に展開するのだが、徴税官の妾になっているレース作りのカトリーヌが、浮気中をねらって踏み込まれた現場にコワニャールは居合わせる事となる。従者たちを指揮する徴税官の浴びせた侮辱の言に、平和主義で温厚なはずのコワニャールは我にもあらず逆上、徴税官の頭を酒びんで割り、襲いかかる従僕を頭突きの一撃で倒す。事件の張本人で遊び人の乱暴な貴族ダンクティさえもが「いや、あんたはなかなか勇猛なかたですな！」¹⁵⁾と感嘆の声を上げる。教授資格を有しながら、女性問題でしくじった神学博士、文学士ジェローム・コワニャールは、作者の代弁者的な主人公の一人であり、シルヴェストル・ボナールに始まって、『現代史』のベルジュレ、更に『神々は渴く』のプロットーに至る「話す人」を代表する人物であろう。しかし彼は、作者の思想のみならず、発表当時の作者の元気をも「代弁」して、いわば「文武両道」を行く珍しい主人公である。

アナトール・フランスの愛する対話の主役たる「話す人」のかたわらには、対話の自由にならない人もまたいて、話す人たちより、よりヒューマンな場面を作り出している。しかし、話す人であると同時に、腕力をも披露できる（ト

ランプのいかさまにかけても遊び人ダンクティは彼に齒が立たないが) ジェローム・コワニヤールこそ, 作者にとって最もたのもしい作中人物なのではないだろうか。

使用図書

- I. Anatole France : Œuvres I, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1984 (Jocaste et Le Chat maigre)
 Anatole France : Œuvres II, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1987 (La Rôtisserie de la reine Pédauque, Le Puits de sainte Claire)
 Anatole France : Œuvres III. 1991 (Crainquebille, Sur la pierre blanche)
 Anatole France : Œuvres IV. 1994 (Les dieux ont soif)
- II. Sylvie Durrer : Le dialogue dans le roman, Nathan, 1999.
 Francis Berthelot : Parole et dialogue dans le roman, Nathan, 2001.

注

- (1) Œuvres I-p. 128
- (2) I-p.129
- (3) III-p. 1057
- (4) III-p. 1064
- (5) III-pp. 1060-1061
- (6) III-p. 1061
- (7) III-p. 1064
- (8) II-p. 652
- (9) II-p. 652
- (10) II-p. 653
- (11) III-p. 729
- (12) III-p. 730
- (13) III-p. 730
- (14) III-p. 733
- (15) II-p. 117